

三好達治の鷗の詩を読む

飛 高 隆 夫

三好達治の小動物好きは、よく知られている。そのことを、もっともよく示すものとして、次のような話がある。明治三十九年、七歳(数え年)の三好は、京都府舞鶴町の父の知人の家に養子に貰われていったが、その理由を、三好は、河鹿のせいに行っているのである。それは父からの、その「小父さん」を前にしての突然の問いであったが、「小父さんの、お家へ行つて、小父さんとこの子供になるかい、」という問いに対して、三好は、「返事に逼られて、一寸思案をめぐらした」が、「一つのことを思ひつくと」「きつぱり」「行く」と答えたのである。その理由を、三好は、自ら「奇妙な理由」とことわりながら、その「小父さん」が「一年ばかりも前」に持って訪ねてきて、そのまま持ち去ってしまった河鹿が、「私の心に、私の眼の前に、彷彿と浮び出た」、つまり、「あの、小さな生き物のため」と説明しているのである(『暮春記』、「改造」昭和11・5)。

このような三好達治の詩の中には、時には一篇の詩の中心的イメージとして、また時には一点景として、さまざまな小動物(「小さな生き物」)が登場するが、その中でも、三好から特別な待遇を受けているものの一つとして「鷗」をあげることができる。いや、鷗こそ、もっとも強く、深く、三好の心をとらえた存在である、といってよいであらう。

鷗が三好達治の詩に初めて姿を見せるのは、三好の第一詩集『測量船』(昭和五・十二刊)の序詩「春の岬」においてである。

春の岬旅のをはりの鷗どり
浮きつつ遠くなりけるかも

この短歌形式の二行詩は、いろいろと論議を呼んでいる。しかし、ここでは、序詩であることを考慮に入れながら、その意味、内容にかぎって考えてみたい。

この詩の舞台である「春の岬」は、伊豆であろうと想定されている。伊豆は、湯が島に療養中の梶井基次郎を見舞うためにしばしば通った、青春の思いの込められた場所である。「鷗どり」は、「旅のをはりの」と形容されているので、渡り鳥の方の鷗である。長い旅路を終えて、波の上に羽根を休めているのであろう。その「鷗どり」が波に浮きながら「遠く」なるのは、見る者、つまり三好の方が遠ざかって行くのであろうと考えられる。このように見ると、鷗は詩であり、青春であらう、ということになる。青春の思いの込められた詩(詩

集)をここに残して、詩人は新たな旅へと旅立ってゆくのである。

鷗が三好の詩によく姿を見せるようになるのは、昭和十四年、三好が小田原に居を移してからのことである。同年七月刊の詩集『艸千里』では、「鷗どり」、及び拾遺の「秋日口占」の二篇に、昭和十六年十月刊の詩集『一点鐘』では、「波」「既に鷗は」「鷗どり」「毀れた窓」「灰色の鷗」の五篇に鷗が歌われている。

遠き日

十とせあまりも遠き日に
われはも何をうしなひし
なつかしき伊豆の浜べに
鷗どりうかびただよふ
見つつめて今しさとりぬ
われはも何をうしなひし

この「鷗どり」は、舞台はふたたび伊豆である。「なつかしき伊豆の浜べ」に浮かび漂う鷗どりを見やりながら、三好は、「十とせあまりも遠き日に」自分は何かを失った、と改めて思うのである。三好は、何を失ったというのか。舞台が伊豆に設定されている以上、ここに出てくる答えは友であろう。梶井基次郎を失ったことの意味を改めて噛みしめているのであろう。もちろん、他の答も考えられないではない。『一点鐘』の中の「木兎」には、「十年の月日がたつた／その間に 私は何をしてきたか／私のしてきたことといへば／さて何だらう……／一つ一つ 私は希望をうしなつた／ただそれだけ」とある。しかし、ここでは、やはり、友と考えたい。失った友への思いが、鷗を三好の心に一挙に引き寄せたのであろう。

『艸千里』拾遺の「秋日口占」は、一連二行、全十三連の長い詩なので、鷗の出てくる部分を抄出することにする。「かへるすべなき」旅を続けている「われ」は、相模野の外れの草山に佇んで、秋の日の

真昼、海の彼方を眺めている。そこに浮かんでいる鷗。

藍ふかき海のはるかに
真白なる鷗どりはも

一羽あてなに思ふらん

波の穂にうかびただよふ

願はくばわが老いらくの

日もかかれ 世の外にして

波の上に、鷗は一羽、孤独なものの思いにふけっているようである。

それを見ながら、旅人の「われ」に仮託された三好の心は、その、世を離れた孤独な姿に、自己の老年の望ましい在り方を思うのである。

次は、『一点鐘』の鷗である。

沖にはいつも

灰色の鷗の群れと

白くくづれる波の穂がしら

ことわりや

われがうれひの

絶ゆる日なきも

「波」では、見るとおり「鷗」は「われがうれひ」と重ねられていく。三好の心は海に。

既に鷗は遠くどこかへ飛び去つた

昨日の私の詩のやうに

翼あるものはさいはひな……

あとには海がのこされた
今日の私の心のやうに
何かぶつくさ呟いてある……

この「既に鷗は」では、鷗は「昨日の私の詩」、つまり、三好の心から飛び立ち、飛び去ったものであり、海は三好の心ということ、
「波」と同じ構成である。鷗は、すっかり、三好の内部に入り込んでしまっている、ということが出来る。
では、次の「鷗どり」はどうであろうか。この詩は、「改造」昭和十六年四月号に発表されている。

ああかの烈風のふきすさぶ
砂丘の空をとぶ鷗

沖べをわたる船もないさみしい浦の

この砂浜にとぶ鷗

(かつて私も彼らのやうなものであつた)

かぐろい波の起き伏しする

ああこのさみしい国のはて

季節にはやい烈風にもまれもまれて

何をもとめてとぶ鷗

(かつて私も彼らのやうなものであつた)

波は砂丘をゆるがして

あまたたび彼方にあがる潮煙り その轟きも

やがてむなしく消えてゆく

春まだき日をなく鷗

(かつて私も彼らのやうなものであつた)

ああこのさみしい海をもてあそび
短い声でなく鷗

声はたちまち烈風にとられてゆけど

なほこの浦にたえだえに人の名を呼ぶ鷗どり

(かつて私も彼らのやうなものであつた)

場所は、「さみしい国のはて」、季節は、「春まだき日」、「季節にはやい烈風」が吹き荒れている。その浜辺の「砂丘の空」を、鷗は、何かを求めて飛び続け、鳴き続けているのである。鷗の、何かを求めて鳴く声は、「たちまち烈風にとられてゆけど」、鷗はなお、「たえだえに人の名を呼ぶ」び続ける、というのである。そして三好は、そのような鷗を指して、「かつて私も彼らのやうなものであつた」というのである。

鷗は、「烈風」に逆らいながら、何かを求め続けている。阪本越郎氏は「鷗どり」の要点は、各連の終わりに繰り返される「かつて私も彼らのやうなものであつた」という感慨のことにある。烈風の吹きすさぶ砂丘の空を飛ぶ鷗に、作者は自分の過ぎた日の生活を思い出し、そこに風に逆らう人間の意志と、やがてむなしく消えていく人間の運命との二重の意味をかけている。「日本の詩歌 22 三好達治」、中央公論社、昭和四十二年十二月)。たしかな鑑賞であるが、ここで問題なのは、「二重の意味」のどちらに比重がかけられているか、ということであろう。しかし、これは、一言でいえる程、単純な問題ではない。「烈風」は運命の表象であろう。鷗は、運命に逆らいながら、何かを求め続けている。求められているものは、「人の名」と表現されているが、阪本氏もいうように、これが、現実の個人名などである筈はない。阪本氏は「青春の日の思慕、人生の郷愁のごときもの」というのであるが、人間にとって、より本質的なも

ののように思われる。そして、第四連第四行の「なほ……たえだえに……呼ぶ」に注目すれば、運命に逆らいながら、圧倒されながら、なお、何か大切なものを求め続ける、そういう意志的な存在として、鷗は表現されているのである。そのように考えると、三好は、「かつて私も彼らのやうなものであつた」と、回想的にいつているのであるが、「私も、再び彼らのようでありたい」という願いが、この表現の背後にあるのではないか、と覚えて来る。この詩に流れる韻律の厳しさが、そのような読みを強いるのである。いずれにしろ、ここに描かれた「このさみしい国のはて」の荒涼とした自然の様相は、三好の詩に初めて現れたものであり、三好の孤絶感が痛切に感じられる。

『一点鐘』において、次に鷗が姿を見せるのは、「毀れた窓」である。この詩も一連二行仕立て、全十三連の長い詩であるが、「鷗どり」とは一転して、明るい、のびやかな詩（内容もリズムも）である。それは、あたかも、何かから解放されたような趣である。

舞台は浜辺の廃屋。その「こはれた窓」の「額縁」を通して、「おれ」は「五月」の海を見ている。波は流れ、ボンボン船が通り、

灰色の鷗もそこに集つて

何かしばらく解けない謎を解いてゐる

というのである。そして、「なんにもない青い海」が「妙に心にしみ」、「それをぼんやり見てゐると」、「ふと故郷の街」が浮かび、「二十前の俺」がそこを歩いているのが見え、「どういふ仕掛けの窓だらう／＼何しろこいつは素敵な窓だ」ということになるのである。

ところで、この詩の中で、「灰色の鷗」たちが解いている「解けない謎」とは何だろう。この意味は、『一点鐘』ではこの詩より後に置かれていて、「灰色の鷗——ある一つの運命について」に語られているのである。

彼らいつこより来しやを知らず
彼らまたいつこへ去るやを知らない

かの灰色の鷗らも
我らと異なる仲間ではない

いま五月の空はかくも青く
いま日まはりの花は高く垣根に咲きいでた

東してここに来る船あり
西して遠く去りゆく船あり

いとけなき息子は沙上にはかなき城を築き
父はこなたの陽炎に坐してものを思へり

漁撈の網はとほく干され
貨物列車は岬の鼻をめぐり走れり

ああ五月の空はかくも青く
はた海は空よりもさらに青くたたへたり

しかしてああ いぢらしきこれら生あるものの上
かの海風は 罽雲は高く来るかな……

しかしてああ げに我らの運命も
かの高きよりして来るかな……

されば彼ら 日もすがらかしこに彼らの円を描き
されば彼ら 日もすがら彼らの謎を美しくせんとなす

彼らいつこより来しやを知らず
彼らまたいつこへ去るやを知らない

かの灰色の鷗にも
我らと異なる仲間ではない

この詩では、見る通り、人間はどこから来て、どこへ去ってゆくのか、という「謎」が取り上げられている。これが、「毀れた窓」にいう「解けない謎」であろう。

晴れ晴れと明るい五月。人々の生活も、常に変わらず、平穏に過ごされている。しかし、それらは、改めて思えば、はかないものである。「沙上」に築かれた城のように。「陽炎」のように。しかし、人々は、そのことを知らぬように、営々と、日々の暮らしに勤しんでいる。そして、「いぢらしきこれら生あるもの」の上に、「海風」や「鰯雲」や、そして「われらの運命」も、「かの高きより」訪れて来るといっているのである。しかし、三好は、この「運命」について、深く問おうとしているのではない。三好は、人生をはかないものとし、「これら生あるもの」を「いぢらしき」と形容した時に、すでに、「運命」を肯定しているのである。そのような三好の心に、青空高く「円」を描き続ける鷗たちの姿も、「謎」は「謎」のままに、その神秘をいっそう美しくしようとするものに思われるのである。こうして三好は、「灰色の鷗」に、「運命」の「謎」を思い、それを、鷗たちとともに、神秘的な、美しいものとするに、「ある一つの運命」——詩人の運命があるというのである。村野四郎氏は、『三好達治詩集』（旺文社文庫、昭和四十四年十月）の「解説」に「制作当時の年代から推察すると、太平洋戦争勃発の年でもあり、ここにいう「げにわれらの運命も、かの高きより来るかな」は、あるいは戦争という具体的な現実を意識しての上ではなかったかと思われるのである。」としているが、否

定する根拠はない。この詩の明るさが、かえって悲しみを呼ぶのは、その為であろう。

「毀れた窓」が発表されたのは、「日本評論」昭和十六年六月号であり、「灰色の鷗」は、「中央公論」同年五月号に発表されているのである。この発表の順序で読めば、「毀れた窓」の鷗たちの解いている「解けない謎」の内容も、直ちに見当がつくのであるが、それでは詩の深い味が失われると、三好は考えたのであろうか。

実は、この「灰色の鷗」は、もう一つの詩、「謎の音楽」と共に発表されている。

春の日のうすら黄ばんだ沙の上に
日もすがらしづかに囁いてゐる海

どこまでも遠くはるかにひろがった

このはてしない青い海原

海とは何だらう

そもそもこの眺望は

小さな船を七つ八つ

今しも遠くへつれてゆく

海よ

こころよい不可思議

解きたい謎の

音楽

この詩は、見る通り、とり立てていうところのない詩である。海の

尽きることない神秘的な魅力を、一つの「謎」と見、「眺望」と「音楽」性の二方面から、軽やかに歌っているのである。「解きたい謎」といっても、それは、解かれるべきものとしてあるのではなく、あくまで、その魅力を味わうべきものとして存在するのである。『一点鐘』においては、「毀れた窓」「謎の音楽」「灰色の鷗」の三篇が、この順序で並んでおり、「謎」を共有する小さなグループを作っている。

ここで確認しておきたいのは、昭和十六年四月に発表された「鷗どり」と、同年五月、六月に発表されたこの三篇（「灰色の鷗」が代表する）との差である。

既に見てきたことの繰り返しになるが、「鷗どり」には、何か圧倒的なものに逆らいながら、何か大切なものを求め続ける鷗の姿が歌われている。この圧倒的なものは、「烈風」というイメージで表現されているのだが、具体的には、おそらく、昭和十六年という時代の状況がイメージされているのであろう。三好は、それを「運命」として受け止めようとし、また、そうしながらも、それに対する抵抗の意志を、この国のどこかに求めようとしたのではないか。しかし、それは、かろうじて、「さみしい国のはて」に「むなく消えてゆく」ようにしか存在しない。その、「烈風」に逆らいながら、大切なもの（ここまで来れば、それを自由と呼んでもよいであろう）を求め続ける鷗の姿に、「かつて」の自分の姿を重ねることで、三好は、せめてもの思いをここに書き留めたのであろう。『三好達治全集』第十二巻所収の石原八束編の年譜によると、この詩には、「ある旅先にて」という副題が付されている、という。当時の三好が、詩の中で、常に自分の在りようを旅人の姿に仮託していたことを考えると、この副題の存在も、にわかには気になるところである。「鷗どり」と「灰色の鷗」と、この二篇の対比を通して、峻烈な時代状況の中で揺れた、三好の姿を見ることができるのである。

二一

次に、戦時下の詩の中の鷗の姿を見てみたい。

まず、昭和十七年七月刊の『捷報いたる』より。三好の戦争詩の典型として、詩集の題名にもなった「捷報臻る」を見てみよう。

捷報いたる
捷報いたる

冬まだき空玲瓏と

かげりなき大和島根に

捷報いたる

真珠湾に米艦くつがへり

馬來沖合に英艦覆滅せり

東亞百歳の賊

ああ紅毛碧眼の賤商ら

何ぞ汝らの物欲と恫喝との逞しくして

何ぞ汝らの饜餮の他愛もなく脆弱なるや

而して明日香港落ち

而して明後日フィリッピンは降らん

シンガポールまた次の日に第三の白旗を掲げんとせるなり

全二十三行の詩の前半部である。三好の戦争詩は、その初めから、敵に対する嘲笑と悪罵に満ち満ちていた。そして、饒舌。風景描写はまったく無いが、あるいは、

鷗鳴四方に起り

草木色青み

百花英発らんかんとする

（「汝愚かなる傀儡よ」）

陽春三月の天

うらうらとして微風わたる

柳条緑をひるがへし

軽塵あがり

土筆たけ

鶺鴒なく

〔陽春三月の天〕

というように、漢詩の表現に寄りかかった、寄りかかり過ぎた、いわば、概念的なものが殆どである。そこで、次の詩はどうであらうか。

われ幼きを携へて

この日風疾き巷に出づれば

砂塵まひ

山に残雪白く

日うららかに

白雲とぶ

わが行く方には

鷗どり街路の上に相群れて

斜めに高く飛びゆくを見る

錯落参差

羽翼白く輝き

彼らみな沈黙して

寒風にむかひて飛翔せり

凜烈たる気流のうち

彼ら黙して啼かず

しきりに高低し

鼓翼しひるがへれり

——よき日かな

皇軍すでにハワイを討ち

マニラを奪ひ

香港シンガポールに二度びかの海賊旗を泥土に仆し

かしこに二度び降伏旗翻翻とひるがへり樹つを見る

我ら四方に戦ひ

戦ひ悉く勝てり

見よこの日

烈風の吹きすぎぶ巷々に

戦勝の旗は家並の軒にはためき鳴り

鉄橋を轟き渡る機関車の胸にも新らしき小旗は高くかざされたり

聞け今いづこにか遙かに君が代の合唱起り

またいづこにか万歳のごゑ幾度か繰りかへしとよもすを聞く

而してこの鄙なる山麓海辺の小都市は

いま昂然として彼の胸ふかくその深き呼吸を息づけるなり

——よき日かな

風早く

雲とび

残雪彼方にかがよひ

鷗どり錯落参差

凜烈たる気流の高きにありて

沈黙し鼓翼す

長い引用となったが、「第一戦勝祝日」全三十九行である。この詩の風景には、見る通り、現実性があり、勝ったという事実は語られているが、三好の代表的な戦争詩に常套の、嘲笑や悪罵は見られない。漢語調は強いが、詩の冒頭と末尾にはほぼ同形で反復される風景に、『一点鐘』の「鷗どり」の風景に通じるものが、感じられないであろうか。「鷗どり」の鷗は、烈風に逆らいながら啼きつづけ、「第一戦勝日」の鷗は、寒風に向かって「沈黙し鼓翼」する。ここに、三好の何らかの意志、感情の方向性が見られないであらうか。

次に、昭和十八年十二月刊の詩集『寒拆』中の「半霄に声あり」全二十三行の前半十三行。

半霄に声あり

風風を拍ち

劫々と天の門わたる朝の声

またかのはるかなる沖の潮騒

波波を撃ち

鬱々とかなたに潮の渦まく音

蹶蹶たる紫雲ここに破れ

一群の白鷗ここに揚る

羶羶すでにこの境になし

大東亜万里の海に

いま圓々たる太陽は

神州の血もて濯ひきよめし

新生の門出燦爛たる瀆れなき水平線にさしいづる

この詩の風景描写も漢語調が強いが、現実性があり、「羶羶」の語はあるものの、他に、嘲笑、悪罵の表現はない。

次に、昭和二十年六月刊の『干戈永言』中の、「窗の海」全二連の第一連。

北海波黒く

氷霰屢致る

客愁また暗澹として

何事か呼ばんと欲し

更にまた緘黙す

嗚呼人生を必せず

死を必するの時

白鷗烈風に啼く

人事他なし

ただ心機一瞬を尚ぶべし

石原八束編の年譜に「三國行の詩」とある。これは戦争詩ではないが、「人生を必せず／死を必するの時」という表現の背後に、戦争の存在が感じ取れる。

これらの詩に共通するものは、いうまでもなく、鷗の姿である。鷗を登場させるには、風景に現実性が求められる。その風景が、詩の流れを決定するのか。初めに見たように、鷗は、三好の心の中に入り込み、三好と運命を共にするものになった。その鷗への愛着が、敵への嘲笑や悪罵や饒舌を抑制させたのか。いや、おそらく、『一点鐘』の「鷗どり」に込められた思いが、これらの詩の背後にあったのではないか。嘲笑と悪罵とに満ちた、饒舌なところばかりが目立つ三好の戦争詩の中に、このような詩も存在することを、見落とすことはできない。

三

次は、戦後の詩の中の鷗であるが、ここで、戦前の詩の中の鷗の姿を確認しておこう。

先に見たように、初め、それを見ることによって、何かを失ったことを想起させるもの、として登場した鷗は、「われがうれひ」と重ねられ、孤独の中にも思う存在となり、「かつて私も彼らのやうなものであった」とかつての「私」と重ねられ、ついには、「かの灰色の鷗らも／我らと異なる仲間ではない」と、「運命」を共有する存在となったのである。

この、鷗と運命の関わる詩の流れに加えておきたい詩が、もう一篇ある。『砂の砦』（昭和二十一年七月）所収の「一葉舟」である。この

詩は、「灰色の鷗」と同様に、「ある一つの運命について」という副題を持つている。全四十五行のうち、冒頭からの三分の一程を引用する。

天に雪舞ひ

四方に烈風のごゑをきく

景や暗澹として涯なく

波浪かげくろく海を傾け来る

海は傾き去つて飛沫しろく

潮流激し鳴る

海鳥忽ち虚空より下り

みな翼にしづくたれて叫び啼けり

ああこゑあるものかくことごとく悲泣すれども

天日の影を見ず

暗雲脚白く垂れ

低徊してまた行くところを知らざるに似たり

かかる時しも

げにかかる極地の昏迷と息苦しき虚無との情緒をさき

惨たる視野をつんざきさきて

舳高き緑色の船は駛る

「灰色の鷗」において、三好は、人間の運命を美しい「謎」として歌った。そして、全詩を引用すれば直ちに明らかなのであるが、三好は、この「一葉舟」において、荒れ狂う海を疾走する「緑色の船」に託して、一国の運命を、その危うさから来る「緊張」の上に成立する「美の形而上学」として歌うのである。詩中の「海鳥」が鷗であることは、いうまでもないであろう。

この流れは、戦後二冊目の詩集『砂の砦』（昭和二十一年七月）所収の「鷗」において、行き着くところに行き着いた、と考えることが

できる。

つひに自由は彼らのものだ

彼ら空で恋をして

雲を彼らの臥床とする

つひに自由は彼らのものだ

（第二・三連略）

つひに自由は彼らのものだ

彼ら自身が彼らの故郷

彼ら自身が彼らの墳墓

つひに自由は彼らのものだ

つひに自由は彼らのものだ

一つの星をすみかとし

一つの言葉で用たりる

つひに自由は彼らのものだ

つひに自由は彼らのものだ

朝やけを朝の歌とし

夕やけを夕べの夢とす

つひに自由は彼らのものだ

この詩には、見る通り、別に難しいところはない。空と海との間の広々とした空間を自分たちの世界として、自由自在にふるまい、生を楽しんでいる鷗の自由さを称えたものである。彼らには、今や、「謎」も「運命」も関わりはない。第四連の「彼ら自身が彼らの故郷」であり、「彼らの墳墓」であるということは、鷗たちは、彼ら自身の生も

死も、自分自身で握っているということである。つまり、彼らにあるのは現在だけであり、彼らに意味があるのは、現在だけである。こうして、彼らはすべての運命からも解き放され、完全な自由を獲得したのである。これこそ、詩人三好達治にとって、絶対的な理想の境地であらう、絶対に到達不可能な——。それを三好は、鷗に託して夢見たのである。

なお、付け加えておけば、第五連の、「一つの星をすみかとし／一つの言葉で用たりる」の二行には、この詩が書かれた時代の思潮を背景に置いてみると、世界一国家への夢想をここに読むことも不可能ではない。

ところで、三好の中で、なぜ鷗と運命とが結び付いたのであろうか。それを示唆するのが、昭和二十七年三月刊の『駱駝の瘤にまたがつて』所収の「係蹄」である。省略しながら引用する。

あの砂山のかげから、青い海と、鷗の群れを見た時に、人々から遠くはなれて、私をはじめてそこまで出かけていつた時に。

その時私の心は、最初の病気に苦しんでゐた。海は青く、太陽は高かつた。遠く故郷を出て、私がそこではじめて見たものは何であつたか。ああその風景は、今日もなほ私の眺望にかかつてゐる。

——(中略)——

噫あの砂山のかげでできたざわめき、笑ひごゑ、沈黙、またそのやさしい歌ごゑに影をかざして遠く砂丘を越えていつたパラソール。

かうして人生は暮れてゆく。今日またおとろへた私の視力に、くもつた眼鏡の遠景に浮んで見える、その風景は夏の日の真つ昼間、ツルゲニューフや独歩を読んだ日のあの砂山、青い海と、鷗の群れ、ふつくらとしたちぎれ雲のかず、——さうして思出の遠い秘密の方角へ消えていつた歌ごゑ。

すべてはあの日に何を意味してゐたのだらう。

——(後略)——

「その時私の心は、最初の病気に苦しんでゐた。」とある「心の病氣」は、人生についての疑問であらう。その疑問をかかえて旅に出た私は、「あの砂山のかげから、青い海と、鷗の群れを見た」のである。「その風景は、今日もなほ私の眺望にかかつてゐる。」というのは、その時、心に抱いていた人生についての疑問は、まだ解けていない、ということである。そして、そのような、解くことのできない疑問に捕えられた自分の人生を、一つの「係蹄」にかかったようなものだと、三好はいうのである。解けない疑問は、謎となる。つまり、三好において、鷗は、「解けない謎」、「運命」に関わるものとして、意識の中にとどめられたのである。「ツルゲニューフや独歩を読んだ日のあの砂山、青い海と、鷗の群れ、……」については、「放下箸」(『文学界』昭和二十九年五(七月)の、少青年時代の読書の思い出に、独歩のつぎに心惹かれたものとして、ツルゲニューフの「懐疑的なニヒリズム」「薄暮世界」が挙げられている。